

エゴノキ

宮内 泰之
(園芸文化研究所)

Styrax japonica

MIYAUCHI Yasuyuki

1. はじめに

エゴノキ (*Styrax japonica*) はエゴノキ科エゴノキ属の落葉小高木である。北海道(日高地方)、本州、四国、九州、沖縄のほか、朝鮮半島、中国等にも分布している。関東地方やその周辺では雑木林や谷沿い等、人里から山野にふつうにみられる。春に芳香のある白い花を枝先に垂れ下がるように咲かせ(写真1)、やがて青白い実をつける。

エゴノキは公園樹や庭木として使われるほか、街路樹などでもたまに見ることがある。雑木林に自生することから雑木の庭に植えられるほか、ほのかに香る清楚な白い花は日本庭園にもよく似合う樹木である。



写真1 エゴノキ(花)

2. エゴノキの特徴

エゴノキは、枝から垂れ下がる花や実を見れば、すぐにそれとわかる。しかし、葉を一枚だけ取ってみるとその形に特徴が少なく、エゴノキと言い当てることはなかなか難しいかもしれない。葉の縁の鋸歯は浅く、ほとんど無いように見えるものもある。よく見れば葉の裏や葉柄に茶褐色の星状毛(一点から放射状に伸びている数本の微細な毛の束)が生えているのがわかるが、星状毛の存在を知っていなければ気づくのは難しい。しかし、葉を一枚ではな

く、枝ごと観察してみると、節(せつ:葉柄の付く茎や枝の部分)に米粒のような小さな芽がついているのがわかる(写真2)。これは側芽で、この状態で冬を越すから冬芽でもある。また、芽が鱗片葉に包まれておらず剥き出しとなっていることから裸芽とされる。エゴノキの裸芽には星状毛が密生しており、これが鱗片葉の代わりに芽を寒さや虫から保護する役割を担っている。エゴノキは節に必ずこの裸芽がついているため、落葉後も容易に見分けることができる。



写真2 エゴノキ(側芽)

ただし、野山や公園に生えている株を観察している場合、冬芽のような細かいところを見なくても、幹肌を見ればエゴノキとすぐに分かる。エゴノキの幹肌は、通常は黒くて滑らかで、ほかにこのような樹種は見当たらない。サルスベリやヒメシャラ等のように、樹皮がはがれて美しい模様になるものはよく知られているが、エゴノキの幹も十分に鑑賞対象になる。

同じエゴノキ属にハクウンボクという落葉高木がある。葉は大形で円形に近く、葉の先には顕著な鋸歯がある。花のつき方も、多くても5、6個ずつ垂れ下がるエゴノキに対して、20個ほどの花が穂のようになって垂れ下がるハクウンボクとの違いは一目瞭然である。ただし、花のつき方は違うが、一つ一つの花や実はよく似ている。

3. エゴノキの名前の由来

エゴノキの名前の由来は、実の皮がえぐいことからというのが一般的である。別名の「ロクロギ」は、この木の材が番傘のロクロ(傘の骨と支柱をつなぐ部品で傘の開閉時に上下に動かすもの)に用いられていた、あるいは、ろくろ細工に使われた等の説がある。「ちさ／ちしゃのき／ずさ」等の別名もある。これは、中国地方の方言の「ちなり(乳成り)のき」が転化したものという説がある。「ちなりのき」は、白い実がたわわに実っている様子からきたものであろう。また、「根株からたくさんの萌芽枝が発生する様子(子沢山)から、九州地方ではコヤス(子安)、コヤスノキ」(鈴木・福田、2012)と呼ばれていた

ようである。

万葉集には「やまぢさ」もしくは「ちさのはな」という呼び方で、三種ほど詠まれている。一般的にはそれらはエゴノキを指していると考えられている。しかし、牧野富太郎はその著書の中で、それらをいずれもイワタバコであると断定している。仮に牧野の説が正しいのであるならば、多くの植物が詠まれている万葉集の中で、エゴノキは登場しないことになる。先にも述べたように、エゴノキは人里にふつうにみられる植物であり、清楚な花とその香りから、万葉人の目にも触れていたと考える方が自然であるのだが、はたして万葉集の「ちさ」はどの植物を指しているのだろうか。

ちなみに、単に「ちさ／ちしゃ」といった場合、野菜のチシャ(レタス)を指すことが多いようだ。ムラサキ科の落葉高木のチシャノキは、若葉が食べられることからその名がついたようである。そのほか、クスノキ科のアブラチャンもチシャノキと呼ばれることがある。

4. エゴノキの果実の毒性と毒流し漁

エゴノキの実、特に果皮にはエゴサポニンと呼ばれる成分が多く含まれており、これが名前の由来となる‘えぐみ’をもたらしている。「この実をすりつぶして水に溶かすと、サポニンには界面活性作用があり、よく泡立つことから、実際にせっけんのかわりに使われたこともあり、セッケンノキ(福井、大分、鹿児島)やシャボンノキ(福島)、シャボンダマ(茨城、千葉)、サボン(石川)などの名がある」(鈴木・福田、2012)。ムクロジ、トチノキ、草本植物のサボンソウ等もサポニンを多く含んでおり、同様に昔から石鹼として利用されてきた。

このサポニン、今日では石鹼としての利用よりも、「魚毒作用があることから、昔、魚の捕獲(毒流し漁)に使われた」(鈴木・福田、2012)、ということの方が注目されているようであり、多くの資料で同様の内容が説明されている。一方、「これの果実を魚毒にする事実は一般には知られていない」(前川、1981)とする説もある。もちろん、現在では法律によりこのような行為は禁止されており、自然保護の観点からもほとんど行われていないはずである。それだけに、毒流し漁は謎めいており、人々の興味を引いているようである。

この点について、植松(2000)は、奄美大島での地元漁師への聞き取り調査に基づき、次のように述べている。すなわち、干潮時に、エゴノキの実をすり潰した汁をサンゴ礁の水たまりに流すと、魚が麻痺して浮き上がってきて、これを捕獲する。しかし、捕獲した魚を新しい水に放してやると、たちまち息を吹き返して泳ぎ始める。したがって、魚をすべて毒殺してしまうような漁ではなかったということである。

エゴノキの実による毒流し漁の存在は確認された。しかし、サポニンが種子捕食者に消化阻害や消化管損傷などの毒性作用を示す(村上ら、2006)とされ、そのサポニンが魚を殺すに至らないという点については、やや疑問の残るところである。さらに、鳥は食べても大丈夫なのだろうか、という疑問も残る。実際に、落葉後に枝にぶら下がったエゴノキの実を数羽のヤマガラがついばんでいるのを見て、冬鳥の貴重な食料になっているのだと実感したことがある。橋本ら(2001)は、ヤマガラは毒のあるエゴノキの果皮を除去して種子の胚乳だけを食べ、また、種子の一部を貯蔵したことを観察したことから、ヤマガラは三宅島においてエゴノキの種子散布者として機能している可能性が高い、と述べている。一方、村上ほか(2006)によると、果皮を除去したエゴノキの種子は果実のままよりも発芽率が有意に高く、また、果皮に含まれるサポニンの量は果実が落下すると急激に減少することから、サポニンが発芽を抑制しているとは考えにくいとしている。以上のことから、ヤマガラは果皮の除去や種子の貯蔵によりサポニンの毒性を避けて食料としている。また、エゴノキの方は、種子が成熟するまでサポニンにより果実を保護し、種子の成熟後はヤマガラによって発芽率がより高い状態で貯蔵散布してもらうことができる。つまり、ヤマガラとエゴノキは果実を通して共生関係にあるといえる。

5. エゴノキと虫

エゴノキと関係を持っている動物はヤマガラだけではない。エゴノキの花が終わる頃、枝先に花のようなものがもう一種類付いていることがある。それはバナナのような形の袋状のもので、初めて見た時、果実の出来損ないかとも考えたが、エゴノキの実とは明らかに異なる。後日、それがエゴノネ

コアシと呼ばれる虫こぶで、その中にエゴノネコアシアブラムシが寄生しているということがわかった。7月頃、虫こぶの先端からエゴノネコアシアブラムシが出てきて、イネ科のアシボソに飛んで行き世代交代を繰り返した後、秋にエゴノキに戻ってきて側芽に卵を産み、翌年ふたたびエゴノネコアシができる、というサイクルになっているそうである。エゴノキ、アシボソ、いずれも雑木林や人里等、生育環境は同様であり、エゴノネコアシアブラムシにとっても都合のよいことであろう。

一方、梅雨から初夏にかけて、果実だけでなく葉を丸めたもの(揺籃／ようらん)もぶら下がっている様子を見かけることがある。これは、エゴツルクビオトシブミ(写真3)の仕業であり、揺籃の中に卵をうみつけ、この中で幼虫がかえり、蛹になり、羽化して飛び立っていく。オトシブミの仲間には、揺籃をぶら下げておくものと、切り落としてしまうものがある。後者は、切り落とすことによって植物が生成する寄生者にとっての毒性成分から幼虫を守ることになるが、地面の上では外敵に狙われる危険が高くなる。一方、エゴツルクビオトシブミは前者であり、ぶら下げておくことにより外敵からの危険は減少するかもしれないが、幼虫に対するサポニンの影響はないのであろうか。



写真3 エゴツルクビオトシブミ

6. エゴノキの園芸品種

エゴノキは園芸品種としての改良はあまり進んでいない。よく見られるものとしては、‘ベニバナエゴノキ’(‘Roseus’)、あるいは、‘ピンク・チャイムス’(‘Pink Chimes’)等がある。紅花をつけるエゴノキは1976年以前に日本で発見され、イギリスでピンク・チャイムスと名付けられたようである。両者は園芸品種名が異なるが、ベニバナエゴノキは紅花のグループの総称である。この他、成長が極めて遅い矮性の‘イッサイエゴノキ’(‘Issai’)という園芸品種も流通している。

変わり物としては、枝垂れるタイプの‘シダレエゴノキ’(‘Pendulus’)や、突

然変異によって発生した畸型的品種の‘ガンボクエゴノキ’（‘Zigzag’）が知られている。特に後者は、世界に1本のみ実在する珍木といわれ、岩手県の天然記念物（大籠のガンボクエゴノキ）に指定されている。この個体は、「どの枝も電光形に折れ曲がり、秋の空を渡る雁の群（雁行）のように見えるのでガンボク（雁木）の名が付いたものである。ガンボクエゴノキの一世は、昭和43年（1968）に多量の開花を見たあと、衰勢に傾き、昭和47年に枯死してしまった。その原因はナラタケの菌糸の寄生によるものであった。二世木は、一世木のヒコバエを移植して育てたものである。この木は、エゴノキが雁木状に折れ曲がるという奇形に加えて、花が八重咲きという珍木である」（岩手県政策地域部NPO・文化国際課）。

参考文献

- 岩手県政策地域部NPO・文化国際課（2012），大籠のガンボクエゴノキ，いわての文化情報大辞典<http://www.bunka.pref.iwate.jp/rekishi/bunkazai/index.html>
- 橋本啓史・上條隆志・樋口広芳（2001），伊豆諸島三宅島におけるヤマガラ *Parus varius* によるエゴノキ *Styrax japonica* の種子の利用と種子散布，日本鳥学会誌，51（2）：101-107
- 前川文夫（1981），植物の名前の話，八坂書房
- 牧野富太郎（1970），万葉歌の山ヂサ新考，牧野富太郎選集第二巻，263-275，東京美術
- 村上智美・林田光祐・荻山紘一（2006），ヤマガラによる貯蔵散布がエゴノキ種子の発芽に及ぼす影響，日林誌，88（3）：174-180
- 鈴木和夫・福田健二（2012），図説日本の樹木，176-177，朝倉書店
- 植松黎（2000），毒草を食べてみた，文藝春秋
- 薄葉重（2004），虫こぶハンドブック，文一総合出版
- 安田守・沢田佳久（2009），オトシブミハンドブック，文一総合出版